

観峰館
本館4階 夏季平常展示
せんじもん
いろいろ千字文

展示案内パンフレット

展示作品は
ほぼすべて
千字文です笑

展覧会ナビゲーター

千字文之助（せんじもんのすけ）

2022 年 7 月 2 日（土）～9 月 4 日（日）

*出品作品は、キャプション左下の番号順にご覧ください。

（公財）日本習字教育財団 観峰館 / 本館4階 夏季平常展示

いろいろ千字文

令和4年（2022）7月2日（土）～9月4日（日）

出品リスト

No	作品名	作家名	制作年代／出版年（西暦）	法量（縦×横、cm）	頁数
一、テキストとしての千字文					
1	間中本 智永真草千字文（和刻本）	智永（松平忠和／旧蔵）	江戸中期 刻	32.1×18.0cm	1冊
2	草書千字文	懷素	唐・貞元15年（799）書 中国・清時代 刻	37.2×20.1cm	1冊
3	李雲海行書千字文（和刻本）	李雲海	天保13年（1842）跋	27.8×18.1cm	2冊
4	楷書千字文	姜立綱	明・弘治元年（1488）書 江戸後期 版	26.1×17.4cm	1冊
5	隸書千字文	銭泳	嘉慶10年（1805）書	31.5×19.0cm	1冊
二、千字文の出版（一）					
6	本朝歴代群書法帖	（志賀登龍／書）	明和9年（1772）（享保10年・1726書）	28.0×18.5cm	1冊
7	草書千字文（三）	細井広沢	享保19年（1734）	27.3×18.1cm	1冊
8	楷書千字文	細井広沢	天保4年（1833）版	26.9×18.1cm	1冊
9	篆書千字文	市河米庵	昭和15年（1940）出版	23.3×13.5cm	1冊
10	真書千字文	巻 菱湖	江戸末期	26.0×19.0cm	1冊
11	真行草三体千字文	村田海石	明治40年（1907）再版	21.4×14.8cm	1冊
12	行書千字文	巖谷一六	明治14年（1881）初版	22.9×14.7cm	1冊
13	真行草千字文	巖谷一六	明治24年（1891）	25.7×16.9cm	1冊
14	真書千字文	日下部鳴鶴	明治27年（1894）	25.8×17.0cm	1冊
15	楷書千字文	中村不折	大正8年（1919）	25.5×16.9cm	1冊
三、千字文の出版（二）					
16	楷書千字文（全）	（不詳）	明和6年（1769）	25.4×17.5cm	1冊
17	安永新刻 傍訓千字文（全）	富田東原	安永年間（1772～1781）新刻	25.6×18.5cm	1冊
18	四季 千字文（全）	龍 草廬	安永9年（1780）	25.7×18.3cm	1冊
19	略解 千字文（完）	石川雅望／識語	寛政3年（1791）識語	22.6×16.0cm	1冊
20	両点 千字文（全）	雪隠膝淵	享和元年（1801）	26.6×18.0cm	2冊
21	御家 千字文（全）	葛西水玉堂	嘉永2年（1849）版	22.5×15.3cm	1冊
22	重刻正字 画引十体千字文綱目（全）	葛西水玉堂	嘉永2年（1849）版	21.0×15.0cm	1冊
23	寺子読書千字文（全）	葛西水玉堂	嘉永7年（1854）再板	22.5×15.5cm	1冊
24	改正 千字文 訓点附（完）	（不詳）	安政2年（1855）成刻	25.7×18.1cm	1冊
四、千字文の広がり					
25	本朝千字文 傍注（全）	貝原益軒／遺稿 戸川後学／傍註	江戸後期	25.5×19.0cm	1冊
26	漢篆千字文（元・享・利・貞）	高 芙蓉／稿 曾谷学川／増修	寛政9年（1797）初版	24.0×17.0cm	1冊
27	首書註釈 五体千字文（全）	峰岸侃斎／識語	文化10年（1813）識語	22.4×15.7cm	1冊
28	童宝必読 世話千字文（完）	（不詳）	天保14年（1843）新刻	22.0×15.0cm	1冊
29	真草両点 世話千字文（全）	（不詳）	弘化3年（1846）再刻	22.0×15.0cm	1冊
30	世話千字文教訓絵抄	木村明啓（暁 鐘成）／編・画	文政9年（1826）	22.5×16.0cm	1冊
31	啓蒙人体千字文	佐藤利信／編 江馬春熙／校閲	明治13年（1880）	23.1×15.4cm	1冊
五、千字文を書く					
32	八体千字文	佐々木文山	享保年間（1716～1736）	29.0×13.7cm	8冊
33	行書千字文	新興蒙所	江戸中期	30.6×19.3cm	2冊
34	草書千字文	中沢雪城	江戸後期	30.3×17.0cm	1冊
35	楷書千字文	頼 鴨崖	嘉永6年（1853）	28.9×15.2cm	2冊
36	楷書千字文	頼 鴨崖	江戸後期	28.6×15.6cm	1冊
37	草書千字文	土肥樵石	明治24年（1891）	28.7×15.4cm	1冊
38	楷書千字文軸	藤原光行	寛政5年（1793）	107.2×41.2cm	1幅
補、書く道具一矢立一					
39	八日市矢立	小森弥兵衛／造	近代	3.4×4.1×19.4cm	1個
40	八日市矢立（筆入）	小森弥兵衛／造	近代	5.5×4.0×21.2cm	1個

ごあいさつ

当館の平常展示では、所蔵の江戸時代の手習いの手本を特集する展示を継続して実施しています。シリーズ Part 3 は、「千字文^{せんじもん}」を特集します。

千字文とは、子どもたちに漢詩を教え、また書の手本として用いられた漢文のテキストです。中国の梁（502～549）の時代に、時の皇帝の武帝が文官の周興嗣^{しゅうこうし}に文章を作らせたものです。4字を1句とする250個の短句からなる韻文^{いんぶん}です。文字は、能書家として有名な王羲之^{おうぎし}（303～361）の字を模写して集成し、習字の手本にしたと伝えられます。この千字という文字数は、福沢諭吉^{ふくざわ ゆきち}など明治の教育家たちに評価され、やがて常用漢字の文字数へと受け継がれていきます。

この展覧会は、約40種類の千字文^づ尽くしの内容となっています。さまざまな千字文を通して、その奥深さを味わってください！

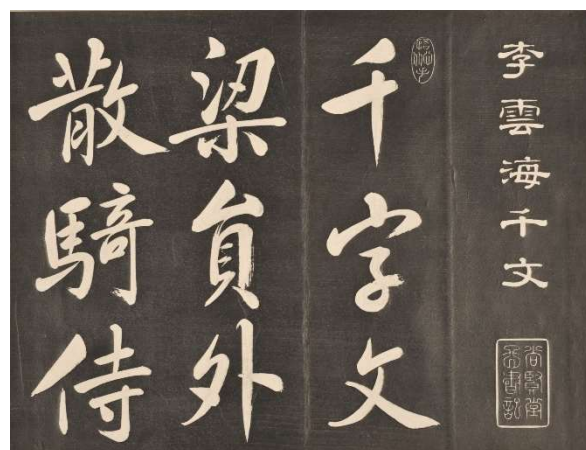


いつの間に Part3 って思った？
Part 1 は令和元年（2019）に「実語教」を、Part 2 は令和3年（2021）「庭訓往来」を特集したんだよ。
くわしくは、観峰館のホームページを見てみてね♪

千字文のテキスト

千字文のテキストとして著名なものとして、王羲之の子孫である
智永^{ちえい}が書いた『真草千字文』(No.1)があります。その他、唐の三大家
である^{ちよすいりょう}褚遂良や、^{そんかてい}孫過庭、^{かいそ}懷素(No.2)などが書いたものが知られて
います。書を習う人にとって初めて学ぶテキストとして重宝され、日
本でも奈良・正倉院への寄進目録である『^{こっかちんぼうちよう}国家珍宝帳』にすでに載
せられています。大陸よりもたらされた千字文は、江戸時代になると
出版技術の向上とともに、数多くの千字文が出版されました。

智永の『真草千字文』のような人気の
テキストは、拓本そのものを模刻するこ
ともありました。また、^{きょうりつこう}姜立綱『千字文』
(No.4)のように、中国よりも日本で人
気となったものもあります。



作品No.3 李雲海「行書千字文」

そして、^{いちかわべいあん}市河米庵などの愛好家たちの
中には、珍しい千字文を自ら法帖として制作(No.3)するよう
なこともありました。

しれっと展示しているけど、李雲海「行書千字文」(No.3)は、とってもめずしい拓本だよ。これだけでも見て帰ってほしい作品です。



千字文の著者たち

日本国内で千字文が多く出版されるのは、江戸末期から明治・大正時代にかけての頃です。日本の識字率^{しきじりつ}の高さからも分かるように、当時は寺子屋^{てらこや}や学校教育の中で、字をきちんと学んでいたことと関係

するでしょう。

千字文を多く書いた書家として

は、巻^{まき}菱湖^{りょうこ}、村田海石^{むらたかいせき}、巖谷一六^{いわやいちろく}、

日下部鳴鶴^{くさか べめいかく}などがいます。例えば、

巖谷一六は、約15種類の千字文

を書いています。その多くが版を

重ねていますので、出版数は相当

な数に及ぶでしょう。関西では、

村田海石がダントツの数を誇っています。

不思議なことに、書家たちが肉筆^{にくひつ}で書いた千字文はほとんど残っていません。これは、あくまで初めて学ぶのためのテキストであり、作品として書くことが少なかったからといえます。



日下部鳴鶴さんは、彦根出身の書家なんですけど、今年が亡くなって100年の節目にあたります。

肉筆の作品は、企画展に出品しているよ～。

☆ちょっと豆知識 寺子屋と寺小屋の違い☆

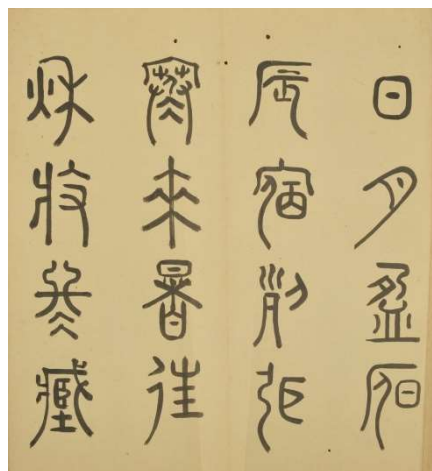
寺子屋は、江戸時代前期に寺院で読み書きを教えた学問所のことです。主に上方で用いられた言葉ですが、全国に広まりました。そして寺子屋に通う子どもたちを「寺子^{てらこ}」と呼びました。時代が下ると、寺子屋の教師（寺子屋師匠）の自宅を私塾とする場合もありました。一方、寺小屋は、「寺にある小屋」のことです。

なお現在では、寺子屋と寺小屋は、混同されて使われています。

佐々木文山という人

展覧会にならぶ作品の中で、ひときわ目を惹くのが、佐々木文山（1659～1735）の千字文です。

佐々木文山は、江戸の生まれで、兄の玄龍^{げんりゅう}も書家であったことから、



ら、幼い頃から書くことを得意としていました。展示中の作品（No.32）の通り、篆書、隸書、楷書、行書、草書のあらゆる書体を書くことができ、いわゆる「唐様^{からよう}」の書家でした。武士を中心に、弟子も多くいたといい

作品No.32 佐々木文山「篆書千字文」 ます。

文山は、各地に肉筆の作品を遺していますが、特に神社仏閣に多くの扁額へんがくを書いた書家としても知られています。交友関係も広く、兄貴あにき肌はだの信頼のおける人物だったのでしょう。

展示の千字文が、どのような目的で書かれたかは分かりませんが、多くの弟子へ与えたものだとなると、彼らは、師匠の圧巻の書きぶりに驚いたことでしょう。

佐々木文山さんや葛西水玉堂さんに注目する展覧会って、他にないよね。担当者の思考が、マニアックとしか言いようがないよね～笑



葛西水玉堂という人

葛西水玉堂かさいすいぎょくどうという人物をご存じでしょうか？おそらく、多くの方は誰だろうと思うでしょう。

葛西水玉堂は、『寺子読書千字文』（No.23）の作者であり筆工者として名前が見えます。他に、『御家 千字文』（No.21）の校者（校正を担当した人物）としても名前が見えます。二つの書物の出版を請け負ったのは、「天王寺屋市良兵衛てんのうじ やいちろう べえ」という京都の京極通り五条上るの住所にある書肆しょし（本屋）です。この天王寺屋市良兵衛の書肆の名前が「水玉

堂」であり、また「梅村」という名字も使っています。

以上のことから、葛西水玉堂とは、本屋の主人であり、本名を梅村市良兵衛といい、葛西水玉堂というペンネームで、手習い本の筆工や編集を行っていたことが分かります。本屋の主人でありながら、書も書ける人物として、当時はよく知られた人物でした。



さいごに、僕からひと言。
僕は、「真行草三体千字文」（No.11、左下画像）の裏表紙に書かれた、らくがきから生まれたんだ。
発見してくれた人に感謝だね♪
そうそう、この作品は、関西でたくさん
の手本を書いた村田海石さんが
書いたものだよ。海石さんの人気はす
ごく、そんな人の本に書いてもらっ
て、なんだかうれしいな～。
そこには、僕の本当の名字も書いてい
るから、ぜひ探してみてね。

じゃあ、今回はこの展覧会を見てくれ
て本当にありがとう！また会える日
を楽しみにしてるよ～。



令和4年(2022)7月2日印刷・発行

編集 公益財団法人 日本習字教育財団 観峰館

所在地 〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町 136

TEL 0748-48-4141 FAX 0748-48-5475

<https://www.kampokan.com>